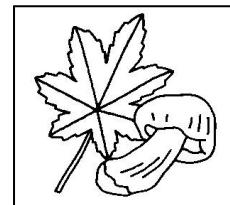


2017 年秋号

ぷらう 57号



発行：TEACCH プログラム研究会

会長のつぶやき

TEACCH プログラム研究会 会長 内山 登紀夫

発達障害者支援法も改正され、自閉症スペクトラムの子どもや成人へのサービス制度も少しずつ充実してきた。自閉症スペクトラムという障害は知的障害や精神障害と比較すると「若い」障害である。「若い」というのは色々な意味があるが、一つは「歴史が浅い」ということで、カナーが報告したのは1943年から歴史は70年ちょっと、アスペルガー症候群は実質的にはローナ・ウイングが報告した1981年から注目されてきたから40年足らずの歴史である。他の障害と比べて、歴史が短い。もう一つは、過去は基本的に子どもの障害であったから、支援のための研究や実践も子ども中心になされてきた。

私は今年還暦になったが、駆け出しの時に相談していた自閉症の幼児は立派な成人になり、当時思春期だった自閉症の人は中年期になっている。老年期の自閉症スペクトラムの人に出会う機会も増えた。

TEACCHが強調してきたように自閉症スペクトラムは生涯にわたる障害である。一方、サービス体制は幼児期、学童期、成人期というように年代で分けられている。特定の時期しか支援しない、あるいはシステム上特定の時期しか支援できないということが多い。例えば、小学校の先生は小学校時代しか支援できない。どの時期の支援者も、自閉症の人が、どのような生涯を過ごすのか、中年期や老年期はどのような支援が必要なのかということを考える必要がある。

自閉症研究の歴史が若いということと、子どもの障害と認知されてきたことから、長期間のスパンで支援を考えるという視点がこれまでは乏しかったように思う。

日本でも老年期の自閉症スペクトラムの支援を真剣に考える時期になっている。



佐々木先生追悼

TEACCH プログラム研究会 常任理事 諏訪 利明

その知らせが大学に届いたのは、まさにその日の午後。ちょうど会議中だった。事務方から「佐々木先生がお亡くなりになったらしいが、詳しい連絡はあったか？」という問い合わせが来たことが最初であった。もちろん、直接、連絡を受けたわけではないし、耳を疑うようなその知らせに思い切り動揺して、とりあえず知り合いに問い合わせしてみても、もちろん誰も知らず、仕方がないので、やむなくご自宅に電話をした。正直、いてもたってもいられなかったのだ。

佐々木先生が大学を退かれてからは、それほど連絡を取ることもなく、たまに連絡をしても電話には出られないことが多く、今回も繋がらないかなあ、と思った矢先、電話口には奥様がお出になられた。「あの・・・」勢いで電話したものの、何と言えがいいのかよくわからなくて口よどんだこちらに対し、奥様はどこまでもお茶目に一言「聞いちゃったの？」と。

「やっぱり本当の事だったんだ。」と思ってから、そこから先は何を話したかよくわからない。ただ奥様が話すには「若い人たちがどんどん頑張っていて、いろいろ引き継いでやってくれたから、パパが一番の幸せ者よね」と二人で話していたこと、「入院していたのだけれど、今は家に帰ってきて、諏訪さんも、(パパが) 家が一番好きだったってことは知ってたでしょ。だから今はホッとしていると思う。」ということなど奥様からの話を聞けば聞くほど佐々木先生のお姿がしのばれて、電話口でうなづくことしかできなかった。ただ、先生が安らかな最期であったことは、奥様の話ぶりからも伺うことができた。こちらから何を話したか、正直覚えていないが「これからも頑張ります。」というようなことを言って、受話器を置いた。

川崎医療福祉大学に勤務して6年。自分が大学に来た時には、既に佐々木先生は大学の仕事から退かれる直前で、いろいろな報告事項を伝えるたびに「いいですよ、それで。」「どんどんやってください。」「思うようにやってください。」何の話をして、いつもそんなふうに答えられる。現金な諏訪は「じゃ、やらしてもらいます。やっちゃいますよ、いいですか？ 本当に？」というわけで、大学院生を連れてのノースカロライナツアーを定期的実施したり、大学でのトレーニングセミナーを再開したり、地域へのコンサルテーションにどんどん出向いたり、必要だと思うことは何でもやりたい放題させてもらってきた。そういう自分に、もうここからは、誰も「いいよ」とは言ってくれない。後ろ盾なしで自分の行動に説得力をもってあたらなければならない。佐々木先生の訃報を聞いた時、わかってはいたものの、なんだか突然ひとりぼっちになってしまったような一抹の寂しさと、改めて問われる責任の重さを感じた。

今まで一人前のような顔をして大学で働いてきたけれど、果たして自分は何をわかっていたらうか？ 岡山に来て出会う人たちが、皆、口をそろえて佐々木先生から受けた影響について話し、佐々木先生との出会いを感謝し、喜び、誰もが「佐々木先生から学びました。」と誇らしげに答える中で、自分はいまもしかしたら佐々木先生に嫉妬していなかったらうか？ そしてちょっと焦っていた？ だからこそ、ことさらに新しい何かを始めるのに躍起になっていたのかもしれない。「岡山での、そして大学での佐々木先生のことを自分が何も知らない」と気づいたその日から、諏訪の「佐々木先生探し」は始まった。いろいろな人に突撃インタビューを企て、佐々木先生を知っている人たちの言葉を拾い、その中にある佐々木先生の伝えたかったことを探した。自分の知らなかった大学教育に対する佐々木先生の想いや行動、考え方に触れるにつれて、自分の中の空洞だった部分のピースがひとつずつはまり、それまで途切れていたものが着々とつながっていくような感覚を手ごたえとして得ることができた。

「人は自分のできることを精一杯やるだけです。」「そして出会う相手から教えてもらうんです。」「お互いに学び合う関係がいいですね。自閉症の人から、家族から、学生たちから。」「決して自分がでしゃばる必要なんかありません。」「医療と福祉は対等の関係だね。」「だからみんな平等でなくてははいけない。自閉症の人だから、障害があるから、とかそんなことではなしに。」「誰もがもっている自分のいいところを活かして。」「そして、信じて待つということが大切です。」等々、佐々木先生の言葉を響かせながら、この大学で働く限り、自分の佐々木先生探しはまだまだ続くだろう。出会う人の声を聴き、その思いをくみ取

りながら、そこにいる佐々木先生の姿を見る。にっこりと微笑みながら、「ほらね」とでも言いたげにうなずいておられる佐々木先生。どれだけ感謝しても足りないけれど、その気持ちはきっと届いていますよね。

「本当にありがとうございます。これからもみんなでいろいろなことを学んでいきます。どうぞ学び続ける僕らをいつまでも見守っていてください。」



自閉症カンファレンス NIPPON 2017 ポスターセッションに参加して

TEACCH プログラム研究会 常任理事 笠合 竜明

8月26日(土)～27日(日)に早稲田大学にて開催された、自閉症カンファレンス NIPPON 2017 のポスターセッションに TEACCH プログラム研究会として参加してきました。今年も1000人近くの参加者により大盛況となっていました。参加者の中には初めて自閉症カンファレンスに参加した方も多く、「TEACCH を初めて聞いた。」という声も多数聞かれました。

このような中、参加者の多くが休憩時間にポスターブースを見に来られていました。今年は例年に無いくらい個々の関心が高く、ブースに設置してある全体図を見て、「写真を撮っても良いですか?」「写真を撮ってくるように頼まれていまして。」など、会として出展する意義も高まっているように感じました。また、支部パンフレットを手にとっていく方も多く、準備したパンフレットが足りなくなってしまう状況も発生したほどです。ネットワークや学ぶ機会を求めている方も多いようです。「住んでいる地域には無いのですが、入会できますか?」「別の支部の勉強会に参加できますか?」「新しい地域で支部は増えないのでしょうか?」「どのように支部を立ち上げればよいのでしょうか?」と関心の高さを肌で感じました。その証拠に、入会申込書はすべて無くなってしまいました。

単にポスターを見たり、パンフレットを置いておくだけではなく、足を止めた方に声を掛け、会話をすることで更に興味を持って頂けました。T研が大切にしている人とのつながりはこうして広がりを見せていくのだと思います。

今後また、啓発する機会や工夫を模索し、地域で TEACCH プログラムを学べる環境を全国各地で整えて行けたらと思います。そして、支部の皆様、パンフレットの準備等、本当にありがとうございました。

平成 29 年度 第 2 回 TEACCH プログラム研究会理事会 議事録

日時 平成 29 年 7 月 16 日 13 時 00 分～17 時 00 分

参加者（敬称略）：内山、村松、諏訪、宇山、笠合、福岡支部、佐賀支部、香川支部、大阪支部、京都支部、滋賀支部、愛知支部、石川支部、神奈川支部、東京支部、山梨支部（代理）、北海道支部、熊本支部、大分支部、鳥取支部

場所 ベーコンラボ京都駅前

議案 1 実践研究大会 2017 in 神奈川 報告（別紙あり）

会員の参加者は 106 名。1 日目公開講座の参加者は 197 名（会員：104 名、非会員 93 名）であった。今回の大会テーマは「ライフステージに沿った支援」とし、同テーマで公開講座を服巻智子先生（大阪大学大学院連合小児発達学研究所・心と発達の相談支援 another planet）にご講演いただきました。10 年振りの神奈川での実践研開催で、神奈川支部の活性とさらなる連携につながった。

議案 2 コラボレーションセミナー2018 in 京都

平成 30 年 2 月 24 日（土）～25 日（日）に開催。会場について例年とは変更され『京都烏丸コンベンションホール』の予約している。今回の招聘講師は『Laura Grofer Klinger 氏（ノースカロライナ大学 TEACCH 部エグゼクティブ・ディレクター）』で大会テーマを「成人期の支援 ～TEACCH の最新のアプローチ～」として講演をいただく予定。実践報告について、各支部から寄せられた多くの推薦の中から、発表者を輩出していない支部、全国の地域的なバランス、発表内容のバランス、講師の講演テーマ等を考慮し 4 演題を選考し決定した。

今回のセミナーでは、(故)佐々木正美先生への追悼をプログラムに設けるよう準備する。10 月までに、各支部 TEACCH 研にかかわるものなどを中心に、佐々木先生の写真データを村松理事（またはメーリス）に送付。前向きなコメント（50～100 文字程度）についても各支部から集める。

議案 3 土倉との打ち合わせ報告

事務局が土倉事務所担当者と協議を行った。収入と支出の締め時期について調整を依頼した。加えて、資産（切手・土倉事務所管理の通帳）についても併せて整理に取り組む。会計案を事務局で作成し、次回理事会にて検討する。

議案 4 JDD ネットへの参画について

JDD ネットが、助成金の削減により財政難という状況がある。JDD として、個人会員を設ける、団体会員も構成数によって会費を変えるなどの対策を講じる方針。その結果、TEACCH 研は年会費が 3 万円ほど高くなるため、当会として JDD への参画の意義を確認し、継続するか検討が必要である。JDD 入会の経緯とメリットは、有識者団体の連合体として行政や地域社会への影響力や発信する機会をもてる。自閉症支援について、他会と共同して発信していくことは有用であると考え。よって、入会を継続していくことで承認を得る。

議案 5 鹿児島支部設立について

鹿児島支部設立に向けて、作成提出されている書類の不備や不足について訂正が必要。また、活動実績についても具体的な取り組みが見えるように作成していただく必要がある。書類だけではなく、会としての活動実績がどのくらいあるのかが重要。活動報告・計画には、企画の主催者や参加者数・場所・講師等を明記する必要があり、支部が主体となって取り組まれていることについての情報を報告いただきたい。新支部として参加する条件についてはあらためて整備検討が必要だが、目的を明確にし、いたずらに条件を厳しくすることにならないようにする視点も必要。

議案 6 第 13 回 TEACC プログラム研究会実践研究大会 2019 開催地

今回、各支部から TEACC プログラム研究会実践研究大会（以下実践研）についてのアンケート結果を参考に協議。実践研の始まった経緯は、TEACCH のウィンターインサービスをモデルとしており、そもそもは関係している人たちのざっくばらんな集いであった。現在、各企画が大きくなってきており担当支部の負担も大きくなってきている。各支部で開催可能性や条件等について検討する。2019 年は山梨支部が候補として協議。

議案 7 今後の当会の発展的活動について

今後の自閉症支援の充実を見据え、さらなる各支部活動および当会全体の発展のために議論が必要。本部としての役割、支部としての役割、それぞれの会としての目的などを明確に整理して、より効果的な企画を講じていく必要がある。具体的な協議を今後も続ける。

議案 8 自閉症カンファレンス 2017 ポスターセッション

例年、継続して使用しているものを活用し、笠合理事を中心に参加する方向で承認。佐々木正美先生と TEACCH 研とのつながりを表示することや各支部の活動を周知する。

会費納入のお願い

平成 30 年度の会費の請求書は、12 月中に発送予定です。
郵便局決済またはコンビニ決済が可能です。
お早めの納入をよろしくお願いします。

TEACCH プログラム研究会事務局

平成 30 年度総会のご案内

日時 平成 30 年 2 月 24 日(土) 16 時 45 分～17 時 30 分

会場 京都烏丸コンベンションホール

(地下鉄烏丸線 四条駅／阪急 烏丸駅／市営地下鉄東西線 烏丸御池駅 下車)

みなさんの大事な会費執行状況や本部の活動について報告します。

ぜひご参加ください。